

第十一章 方法論

高橋新太郎

——創作主体への溯及と享受主体の復権——

一 文獻學的國文學の出現

明治二十二年十一月、文科大學教授小中村積矩は『日本文学』第十六の巻頭に「國文學を修むる順序」を掲げ、「此學多端にして、初學の徒、準的に悉く者多く、且、各、其師の好む所をのみ學びて、徒に一端を以て、此を皇國の學と思はれる者、少からざる事を憂ふる余り、私に學規を立試むる事左の如し」として、第一に「歴史學」を、第二に「法制學」、第三として「音韻學」を挙げて、その學に進むべき階梯を示した。養嗣子小中村積象の編んだ『陽春遺稿』に収められた、はば向文の「學規私言」の注記によれば、「明治元年稿、廿二年訂正」とあるが、前記「大意」引用文に省かれた「……悉く者多く、且、本居平田以來、古學と稱して、神代以來上古の事のみを研究するか、或は作文、歌、草子物語の類のみを教授して、此を皇國の學と思はれる者、少からざることを憂ふる余り……」(引用者圈点)の文言も見え、明治十五年の加藤弘之發意による「古典講習科」設置への進言書面や同じく「皇典講究所」への関わりには、古代法制を専門とする小中村の「皇國の學」の道統を後代に残そうとする強い意志が窺われる。だが、既に法科大學あり、この年には文科大學に國史科も設置され、従来の哲學・史學・博習學、和文學・漢文學・英文學・獨文學に加えて仏文學が新設されて八学科編成となるなど帝國大學が体制の近代化を図りつつあった時期であり、和文學科も國文學科と改められた。『日本文学史』の名を冠する最初の著作が、新進の三上參次・高津嘉三郎の手に成ったのは翌二十三年であった。

「實に本邦文學史の嚆矢なり」とする彼等の自負は、不十分ながらも西洋の文學史と文學書に學んだ、いうところの「科學的研究」とその方法によって又えられたりしたのであった。小中村に學び、その後を襲った芳賀矢一が直面した問題は、皇國の學「國學の道統を新しい時代に向けていかに改竄するか」であった。神宮の家に生を享けた芳賀は、なによりも「祖先の血と伝統を誇る」(芳賀『矢一』の跋式に於いて)人であった。芳賀が選びとったその後の方向づけは、國學の確學的色彩を払拭し、真淵・宣夏以來の文獻考證の古學の方法を繼承発展させると共に國文學としての新生命を西洋風の「文學史」に見出だそうとしたことにある。しかも、「醇然たる國學専門の學科」(小中村清題「古典講習科開東演說要」)と國體の意義を明らかにし、神宮を廢棄することを目的とした皇典講究所に、國學院が附設され、やがて國學院大學へと発展し、小中村が志向した神學的「皇國の學」の道統も生かされてゆくこととなる。

芳賀矢一『國文學史十講』(明治二十三年刊)は前年に行なつた帝國教育會の講習會での十日間の講演の速記録に少しく手を加えたという制約上からくる粗雑さは残るものの、平易な語り口の中に識見を散りばめ、神代に始まる「上古文學」から當代の明治三十年に及ぶ「現代文學」まで、日本文學の姿態とその學史を明らかにした出色開明の書であった。芳賀が「文學史研究法研究」のため、滿一週年半の他進留學に赴いたのは翌二十三年であ

皇典講究所(こころをこころとせよ)

有終(終)ありすがわりのみやたかひに

開校を總敷として改称。明治十五年十一月朔日開校。「國體ヲ辨明シテ以テ立國ノ基礎ヲ固メ」(小中村清題「皇典講習科開東演說要」)を以テ人生ノ本分ヲ尽メ「國體式教育」ことを根本理念として、皇典の新撰皇紀と皇紀及び旧撰皇紀を講究すると共に、内務省の委託により神宮神樂の復成、任用に賛成。明治二十三年十一月二十二日、新たな教育機關として「國學院」を開校。現在の國學院大學の前身であった。皇典講究所は、第二次大衆の改組によって、H・Oの日本政府への賛成、いわゆる(神道指令)の要請を受けて昭和二十一年一月二十五日に解散。大日本教育會・神宮奉迎會との協議により新たに皇紀奉迎會が設立された。

る。「帝國文学」(明治三十三年七月)の「雜報」子は、「國文学者の歐洲留学」と題して曰く、

……此度の留学は実に文学史研究の爲なりと云ふ。國文学とし云へば、単に吾文化の外に出でず、西洋新科学の潮流以外に立ちて、釈義、考証の事を務むる外、根本的に思想の發展變化を究むる能はず。所謂國学者の陋を今日に再演するもの、如く解し、……天下の國文学に対する誤解、なほ学識ある國民の中に潜在して去らざる今日、学士の留学を見る。……我等が学士の留学を歓迎する所以は、第一に斯る誤見を、教育ある一般士人の頭腦より削除するの機会たらんを思へばなり。願くは、細心緻密の学士に依りて、わが今日の國文学の研究は、歐洲の科学的智識の上に建てたるものたることを天下に証明することを得ん。第二に、世をして斯る誤見を懐かしむる識見なき、無氣力なる一派の國文学者が、落套なる研究の美名の下に隠れて、進んで歐洲思想の大潮流に接触せんとを務めず、固陋頑迷、眼光吾帝國の外に出でざるの迷途を覺醒し、以て國文学界に新光彩を添ふることあらんを惜ずればなり。……

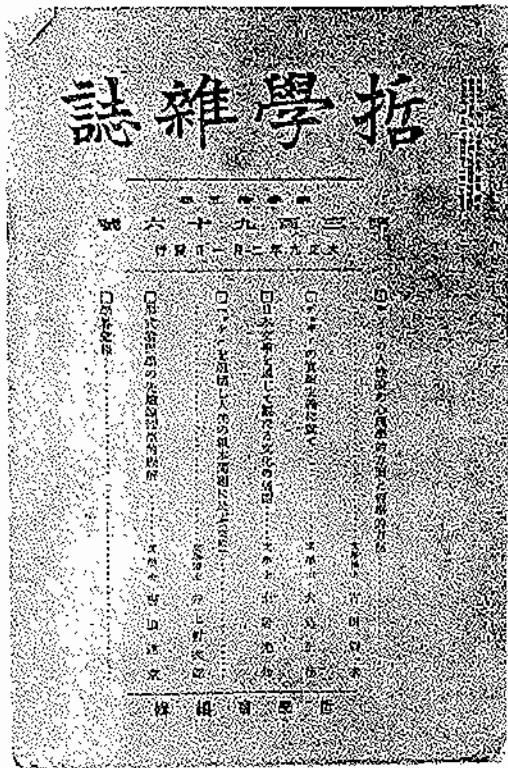
芳賀が留學で摂取したのは、ベーク、ケルティンク、パウレル等の十九世紀独逸文献學であつた。芳賀はそこで近世國學の方法との類同の檢出に力を得て、「明治の國學者」として留國後に「日本文獻學」(東京大學講義録)を指定したのである。芳賀は、文獻學の研究中「最も重要なもの」として「文學史」を挙げ、他は皆その「準備」に過ぎないとしつつ、「文學史として爲すべきことの大半は、テキストクリチックの部に於いてやらなければならぬ。」と説いた。そして、「我が國特有の國粹美を宣揚して、國家國民の健全なる發達を促す」ところに「日本文獻學者」の「理想」と「使命」を見た。芳賀に「國民性十

論」(明治四十年刊)の主著ある所以である。ここに、以後の國文學官學アカデミズムの大綱が定位置され、その榮光と輿界もここに究する。先に國學の「改編」なる語を用いたが、それが芳賀においていかに志向、達成されようとしたかは、國學院同窓会での講演の次の言葉に明らかであろう。(圈点引用者)「今日大學では文學、史學それぞれ専門に分れてやつて居るが、國學院では、メイックの言つた通り、國學の名の示すが如く、一國の學といふことを中心として、すべての學問をやつていかなければなりません。」(「國學とは何ぞや」)

二 「文法」學への模索

明治の芳賀がその文學史に志向した「國民の思想、感情の變遷」を見、「國民の心性生活を知る」ことを、國粹思想の制約からより自由に、いわば正の方向に結集させたのが、東京専門學校に学び、白鳥庫吉に師事した津田左右吉の名著「文學史」(文學史)が國民思想の研究」(大正五年、一〇年)であつた。数多の國文學史を庇して、進歩的國文學者に文學史の正典として統み纏がれてゆく。栗田直躬がその文庫版で解説するように、津田のいう「思想」は「思考された結果としての論理的な形をとるものとは限らず、もっと広く、情意的なものを含む心生活の全体」を意味するもので、「生活に即して湧き出る意欲的なもの、及びそこに生ずる生活気分というものを、中心に見ようとした」ものであつた。

「デモクラシー」を徽標とする大正は、國家的価値に対する文化的価値が鑑われ、アカデミズムが自立的価値を主張しはじめた時代であつた。英文學者土居光知の「日本文學を通じて觀える文化の展開」(「哲學雜誌」大正九年二月、九月)は後に「文學序説」としてまとめられるが、「世界文學」的視野から日本文學の歴史的發展をとらえたもので、土居は、



「哲學雜誌」大正9年2月号

ギリシア文学や英・独文学の比較研究によって、時代に支配的な文芸ジャンルの周期的交替の相に、普遍的法則を仮説し、これの日本文学への適用を画つたのである。文学展開の相に独自の法則性を見る土居の主張は、以後、文学の科学的研究、「文芸」の答を希求する国文学徒に新鮮な刺激と影響を与えて「文学史研究に方法的に歴史学自体をへもちこむ」傾向への反省を發して、『日本古代文学史』(昭和二十六年)『岡改稿版』(昭和三十八年)へと苦闘する西

郷編輯の戦後の仕事にも生かされてゆく。土居は立論にあたってR・モウルトンの『Modern Study of Literature』に示唆を得、日本文学への適用に際しては、垣内松三の教示や、津田の前記の著書に負っている。藤田正喜の『文学形態論——文学形象の学的研究』(大正十二年)はモウルトンの原著を訳述したものであるが、巻末に附した八十頁余の「日本文学史観」は、同じく、「モウルトンの主張に基き、垣内松三氏の教示を糧として坪内逍遙・利達哲郎・田辺高雄・津田左右吉諸氏の文献に徴して整理した日本文学自叙伝

「冬景色」論争(ふゆがけいろろんそう)

「冬景色」は小学生のため(五年生用)の教材として著せられた文章(国文学結核病抵二枚足らず)でも、尋常小学校読本(巻十第九段)に収められたが、大正十一年八月発行の改本では、若干の修正が施され第十三段に取められた。作者は巖谷小波という。田田恵之助は『読み方教録』(大正五)の中で教材「冬景色」の原稿記録を示し、垣内松三は「国語の力」昭和十一年までに四十枚を重ねた。自己の形象理論の要諦の先験として田田の「冬景色」の授業記録をとり上げ、以後両者の二六種によって、国語教育学界に大きな影響を与えた。西郷竹彦は、自己の短歌する児童の観点から、今日の国語教育、文学教育の理論と方法の契機に意欲を燃やし、『総合教育技術』建上(昭和四十二年十一月)昭和四年三月に「冬景色」論——文芸学の観点から垣内・田田理論を論評する」を発表するが、「冬景色」二篇の思想は「骨と心」にあるとする問題に対して、古田弘の反論があり、両者の心算があった。

上木敏郎(かみきとしろう)

一九三二年(〇生)一九八八年二月没。東京大学西洋文学科、及び成蹊学院で教授をとり、のち東京府立大学教授、文化学研究所をつとめた。一九六六年二月に關入社「土田杏村とその時代」を編刊、「土田杏村を語

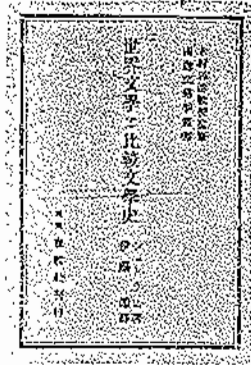
の試み」であった。国文学者で、最も早く東西の文学理論に注目し、国文学の体系的樹立に先駆者の貢献をなしたのは垣内松三であった。宮学アカデミズムで主流をなした文献学的国文学への、国語教育にもわたる包括的批判を行なったのも垣内を嚆矢とする。英・独・仏の文学理論・文芸学説や心理学説の同時代的摂取とその批判的媒介によって、また国学者富士谷御杖の形而上学的歌学や解釈学を現代に召喚して独特の形象理論を發展させ、文芸学的国文学への道を拓いた。形象は、意味と音、ことばとことばを結び合わせるはたらきであって、文学の研究は徹頭徹尾、表現を透して形象の流動を解釈することにあるとした。大正十一年の『国語の力』以後、『国文学体系』、『文学理論の研究』、『文学新生の研究』、『国語表現学概説』、『形象論序説』等で自説を開陳したが、国文学主流からは、正當な検討評価を受けないままに、「国語教育要論」として生き埋められてゆく。垣内の唱えた読み方教授における「センテンスメソッド」は、授業実践者藤田恵之助の名と共に現代に生きていくことは、文芸学者西郷竹彦と国語教育学者古田弘の間にたなかわれた。在野の土田杏村もまた、『国文学の哲学的研究』全四巻(昭和二一八年)で、「実証主義的研究と内面的省察とを結合」止揚した「精神生活的考察の方法」を實踐し、この方法の先駆として富士谷御杖に傾倒して、理念を深め、また「事実の非証法的考察への道」を拓いた齋水仲基に注目している。忘れられた思想家杏村の偉業については、上木敏郎の研究啓蒙によって再検討の機運が高まったが、その文学研究の方法論的営為も国文学界から不当に看過されている。

文学を問いかえずことのない書誌学的国文学や年代誌的印象批評的国文学史への批判と

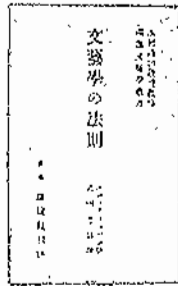
る会」を主宰した。嘗て土田百村と自由大学運動「教育者としての生涯と業績」(読文堂新光社)

反省は、大正から昭和への時代の移りの中で、ようやく学界内部に定着されてゆく。岡崎義恵が「去勢されたる者の如く無氣力に、只過去に盲従せる一群」のごとき激語を交えて大正九年に「古文学の新研究」(五月「国学院雑誌」)を發表する。一方、国学院に学び、学長芳賀矢一の下で国学院大学教授となった折口信夫は、大正十四年に「古代生活の研究」(四月「改造」)を發表し「あれまで力強く働いた国学の伝統は、明治に入つて飛躍力を失うた。為に外側からの研究のみ盛んに行はれた」といひ、「古代文献」の「註釈」として「生活の古典」たる民俗の活用によって「古代生活研究の一分科を受け持つ」ことを宣言し、「新しい国学の筋立て」を示した。柳田園男を師と頼み、フレイザー、ハリソンのFolkloreにも親しみ、独自の詩的直観力を駆使した折口の特異な「古代研究」(昭和四・五年)を代表とする仕事は、文学史的把握にも新生面を開いたが、文献的実証主義を固執する国文学界からは、長く看過された。

文芸学的志向は、以後、美的純議論を核とする岡崎の「日本文学」の提唱(昭和九年)と、石山徹郎・近藤忠義・風巻次郎・本間唯一など、社会経済史的視点から「文芸学」にアプローチする、いわゆる「歴史社会学派」の対立といふかたちで進められてゆく。本村謙治監修による、ベーターゼン・エルマティンゲル・シュルツ・ナードラー・シュトリヒ等の著作を翻訳した「独逸文芸学叢書」(昭和七・八年)や、一九三〇年からコムアカデミヤ編輯で発行のルナチャルスキーというところの「最初のマルキスト的文芸百科辞典」(一九三五年まで、九巻出版されたが、一九三七年「プラウダ」紙上で卑俗社会学的原聞に立つ批評と理論として批判され廃刊)が復活復六訳により「文芸百科全書」(昭和十・一・十二年)シリーズとして、またF・シルレルのドイツ文芸学批判の近著が、「文芸学」の発展と批判(昭和



上「独逸文芸学叢書」右からシュトルヒ「世界文学と比較文学史」左様、エルマティンゲル「文芸学の法則」原、ナードラー「形式史の問題」著訳。
下「文芸百科全書」左「文芸学の方法」の巻末にある広告。右「文藝の本質」著訳。



文藝百科全書

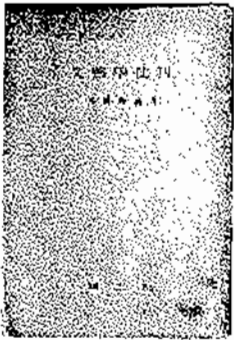
熊澤復六譯

(1) 小説の本質
(2) 文藝の本質
(3) 文藝のジャンル
(4) リアリズム

各冊六頁八〇
全六冊六四〇

小説の積頭
文藝学の方法
内容と形式
ロマンチズム
悲劇と喜劇
藝術と審美
創作方法
文藝の理論
戯曲の本質
戯曲の本質
萬葉の本質
詩歌の本質
ドイツ文藝史
フランス文藝史
英米文藝史
ロシア文藝史
日本文学史

書店和清



高橋義孝『文芸学批判』表紙

十二年」と題されて翻訳されるなどして、文芸学への機運を高めた。しかし、日中戦争の進展につれて、学問的対立として深められるよりも、学問的対立の様相を呈して、学界全般の圏外迎合の日本的昂揚の中で、歴史社会学派の人達の言論は封殺されてゆく。表現の不自由の中で学的批判は、究められずに戦後に待たれることとなる。昭和十三年の国文学界を総括した「日本学的傾向」と題する一文で、吉田精一は次のように言う。「たとへば昨年まで喧ましかつた歴史的方法なども、その根底に於ては批判に耐へない所があつたと思ふ。あの方法には、根本に於て一つの前提、一つの仮定があつた。その前提、仮定は、その儒者に於てはもはや分析を許さないドグマであつた。この点に於て、あの方法は認識論的根柢を欠いてゐたのである。さうして又それと対照すべき在來の圏外主義的研究でも、やはり根柢に於て妥協があつた。その妥協はやはり科学的思惟に耐へないものであつた」(昭和十四年一月「日本文学」)。「源氏物語」への道徳的非難が免せられて、論議的となつたのもこの年であつた。皮肉にも、新高な教学の団体掃一の喧騒をよそに技術学的下部批判として純粋な文献学的達成で学的貢献を果したのは、池田亀蔵であつた。「土左日記」の貫之自筆本を再建した「古典の批判的処置に関する研究」(三部(昭和十六年)と「校異源氏物語」(昭和十七年)がその成果である。池田の文献学へのあくなき情熱と長年にわたる善意の研究者の助力、奉仕の結晶であり、後者は、芳賀博士記念会の後援による養蠟事業として成つた。非常時下にあつて、歴史社会学派の立場からその文芸学的攻究を進めて、すぐれた方向性を示したのは、「国文学研究法に對する二三の反省」(『国文学研究』十四輯、昭和十五年六月)「古典評議考再論」(同上十八輯、昭和十八年十二月)の羽仁新五であつた。吉田精一の「日本文芸学論攷」(昭和二十年)は諸家の文芸学的論究

を検討して方法論的整理と、その問題性を明らかにした。尾田卓次「連歌文芸論」(昭和二十二年)西郷信綱「國学の批判」(昭和二十三年)は共に戦後にまとめられたが、前者は遺著であり、後者の大半は「方島の悲劇がたかかれてゐた昭和十八年に、殆んどおそろおそろとかかれ」、立場は異なるが、いずれも、文芸学的論議を含むものであつた。

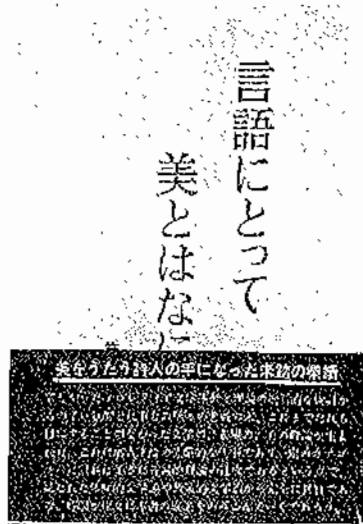
三 方法的現在と「踏絵」としての文学史

文芸学的研究を志向する者にとつて鑑賞・享受をいかに考え、いかに位置づけるかは、つねに関心せざるを得ない課題であつた。新島繁が「文芸学に於ける鑑賞の問題」(『文学研究』昭和十二年一月)で「文学史の方法論上」從つてきた文芸学の方法論上「最も根本的な難問題が横はつてゐる」といひ、戦後「実感の歴史性」に一つの答えを見出そうとしたのもその模索のあらわれである。戦後民主主義文学運動の中で小田切秀雄が除村吉太郎・岩上順一らとの「世界観と実感論争」で「実感の対象の崩り下げ、追及において一つの強力なテコとなる」として孤軍奮闘した問題とも水脈を一にする。

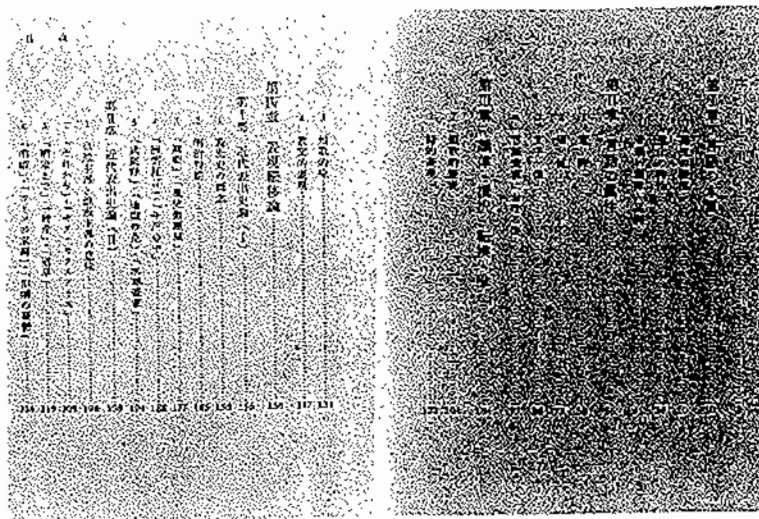
作者の産出的創造に對して、読者の鑑賞作用を共鳴的創作として先驅的位置づけを行なつたのは関東大震災で遭難死した「苦悶の象徴」の齋川白村である。以後、この視点は深められることなく、戦後に甦えることとなるが、文学研究に自己の主體的「鑑賞」を置く位置づけようとする試みは、前述の垣内・土田・風巻・羽仁・尾田・西郷等の著述にも想づいてゐる。文学は果して学問的に研究し得るものか、といつた自ら文芸学存在を疑うまでに先鋭な問題意識によつて、研究主体への照明、文学構造の特殊性と文芸学のアポリアを鮮明にしたのは『文芸学批判』(昭和二十三年)の高橋義孝であつた。『文学研究の諸問



長谷川泉『第五版近代名作選』



吉本隆明『言語にとって美とはなにか』目次



吉本隆明『言語にとって美とはなにか』1. 目次

の『修辭的残像』(昭和三十六年)以下『近代読者論』、『異本論』の諸著であった。佐伯彰一がリチャーズ理論を紹介しつつ、ウォーレン・ブルックス等のニュークリティシズムに触れて「文学読者の問題」を説いたのは昭和二十七年であったが、同じくアメリカに学んだ小西基一が、ことばに密着して批評する「分析批評」の技術を日本文学の場合で研究実践し、川崎寿彦へ分析批評入門(昭和四十二年)の啓蒙もあった。「語り」の記号論から「読み取り」の記号論へと転換したR・バルトの構造分析の方法の適用と論理の組みかえを図った篠田浩一郎「天皇制と日本語——能楽「舞丸」をめぐる——」(現代の眼、昭和五十一年九月)以下の仕事や前田愛の文化記号論的論著『都市空間のなかの文学』(昭和五十一年)もあった。読者の受容が批判的理解を通して作者の新たな創造に働きかける能動的参与を説いたヤウスの『排発としての文学史』(昭和五十一年)や、テキストの不確定箇所たる空

「ことばの芸術——言語はいかにして文学となるか」(昭和五十一年)に思案を進めた。時枝はまた「読者の立場と鑑賞者の立場」(『言語と国文学』昭和三十八年六月)で鑑賞否定論を説くに及ぶが、吉田精一・長谷川泉・加藤海一らの批判を受けた。長谷川には、「作品」を中心に「作者」と「読者」を連ねる三契機と、「発生」・「記述」・「発展」の三契機を縦軸横軸にとり、そこに生じる九つの位相を細分・整理した「文学鑑賞方法七十の原則」の表覧化の試みがある。(『第五版近代名作選』……三契機説鑑賞法70問の実例)

題——ドイツ文学学を中心として」(昭和三十三年)も「文学学の基礎づけ」への試みであり、論理的検証の過程で、マルクス、フロイト、実存主義の文学理論を鋭く分析批判した。『文学非芸術論』(昭和四十七年)は基本的な大前提への疑問の投げかけであり、文学における言語の果す役割への再検討を迫るものであった。

言語に対するに、理解・表現・鑑賞・価値批判をなす主体的立場と研究をなす観察者の立場とがあって、観察者の立場は常に主体的立場をその中に包含することによって始めて可能としたのは、『国語学原論——言語過程説の成立とその展開』(昭和十六年)の時枝論記であった。その『国語学原論 総論』(昭和三十年)は、より多く、文学理論の書として読まれるべきものであった。時枝は言語文学連続説の立場から、文学史は、文章を創作する「書く」歴史と同時に、文章を理解する「読む」歴史を含むものでなければならぬとし、「天才の創作史」であると同時に、「一般の読者の鑑賞の歴史」でもあり、「読む」歴史として記述することによって、始めて、「その民族の精神史」となることができるとした。吉本隆明『言語にとって美とはなにか』二巻(昭和四十年)は、時枝に示唆を得て独創的「表出史論」を展開したもので、吉本の著に触発されて杉山康彦も

隙の充足に読者の役割を見るイザラーの『行為としての読書』（昭和五十七年）の櫻田収による紹介啓蒙もあった。さらに、小森陽一の『文体としての物語』『構造としての語り』（昭和六十三年）の二書は、ミハイル・バフチンやジュリア・クリステヴァ等の理論に示唆されつつ、〈異化としての読書〉に思索を深め、文学テキストと読書する身体に新たな照明を与えて、読みの可能性を理論づけ、検証した画期の成果であった。

作品から作者への溯及と読者の創造的参加への幅幅に、文学研究的方法論的展開の諸相がある。作者が伝達しようとした通りのことばを、正確に読みとること……言語に密着して作品の〈ところ〉を更にはそれを通じて作者の〈ところ〉を解釈するところに文学研究の正道があり、死極に『言語を資料とする人間学』を旨指す吉川幸次郎や佐竹昭広の『新しい訓読学』の主張があり、聖書解釈学の長い伝統の中から、G・タイセンに示唆された、大貫隆・荒井献による『文学社会学』の方法的成果が生まれた。作者受難の時代に、作者の歴史性の証しとしての作品存在の人間学的意味を問いつつ、創作主体の教鞭を説く佐々木健一の『作品の哲学』（昭和六十年）もある。受容美学的立場を基礎に、文学現象を作品の表現に即して捉え、その歴史的な意味を考察した小西基一の『日本文学史』全五巻もその相貌を明かしつつある。終潜に日本文藝の特質の把握が目指されている。方法論的自覚に先鋭であるものの宿命は、文学史の書き換えを必然とすることは、西郷に見る如くである。文学史的営為は、『踏絵』に似るが、私に夢想を語れば、巨視的な文学的コミュニケーション史を背景とした〈文学的経験史としての文学史〉の試みである。真有正の『経験』の思索に導びかれた、〈私〉が問われることにおいて成立する文学史の夢想である。